今金町
釣りバカ医師の日記

北部檜山医師会
今金町国保病院
浦田浩一（うらたこういち）

５月21日（土）晴れ。北海道では６月からが山女の解禁なのだが、岩魚や虹鱒には禁漁期がない。この春初めて渓流（目名川上流）に先輩と入る。実を言うと２週前には真駒内川上流の歩道で巨大な羆の足跡を見つけてしまい（**写真１**）、やむなく入渓を断念したばかりである。この冬は積雪が多く、雪解けで川は増水気味。入渓時に水温を測るとわずか８℃。落ちて流されようものなら、短時間のうちに低体温で死に至る温度だ。魚の活性も低い。共に釣り下りながらポイントを試すも、全くアタリなし。先輩にも、アタリがないようだ。釣りは大自然が相手であり、その日の条件では当然「ボウズ」の日もある。今日はその日かもしれない。

竿をあげて、一息つく。対岸の日陰の崖斜面には、まだ巨大雪渓がでんと横たわっている。それでも日向では、苔の生えた大小岩の間からにょきにょきと多くのエゾフキが伸び葉をいっぱいに広げている。日陰では、猛烈にブユが飛び交っている。彼ら吸血昆虫はまさに今が繁殖期だ。虫除けを塗っても、竿を保持する手は格好の吸血場所だ。すでに６ヵ所は刺されたか。刺された右手首には８cm長の手術痕。不覚にも２年前源流遡行中に転倒し右手を骨折。片手で草を摑みながら、命からがら谷から脱出したことがある。まあ、虫ささされや少々の怪我は、渓流釣り師の勲章みたいなものだろう。

流れの速い深い淵だ。まあここも駄目だろうと思いながらブドウ虫を振り込む。んっ、根掛かりか？と思った瞬間。魚だ。大物だ。（アドレナリン全開で、今となっては記憶が曖昧だが）長い時間の格闘だった。バラさぬよう魚の弱りを待ち、なんとかランディングネットに。なんと45cmオーバーの虹鱒だ（**写真２**）。闘いの激しさは、後で判明した。竿の２段目がへし折られていたのだ。故郷信州の大岩魚でも折れたことがない頑強な竿。魚に竿を折られたのは初めてだ。「腕を折ったり、竿を折られたり、踏んだり蹴ったりだわ…」と、心も少し折られた気がした。川の主（と思う）の健闘を称え、時間をかけてリリースした。また来春に楽しませてくれるだろうか。

縁あって北海道の訪問診療を志し、今金町に着任して今年で早くも３年目。

信州大学病院勤務の頃は、夏に手術（肝移植）が急に中止となると、即日休暇を取得。県境の御嶽山源流部に入った（**写真３**）。土日の出張病院勤務前でも、しばしば午前中現地の渓流に入り、午後当直室で岩魚の腹を割いていたのを思い出す。

今金町着任後、右橈骨骨折（前述）で一時中断していたが、いくつかの渓流を探検し、魚の生態が信州とはかなり違うことに気がついた。町には、「清流日本一」の称号を持つ後志利別川（しりべしとしべつがわ）が流れており、この川に注ぐ多くの自然豊かな支流が、山女や虹鱒、岩魚を育んでいる。山女は信州では「陸封型」だが、北海道では大半の個体が生後１～２年で海に下る（降海型）。このため、６月頃には小型の山女が川にほとんどいなくなる。海で大きく成長した山女は、銀化してサクラマスと呼ばれ、支流を繁殖のため遡上する（禁漁対象魚）。魚道設置のないダムや堰堤があれば、それより上流は虹鱒と蝦夷岩魚（陸封型）の生息地である。また、こちらでは中・上流域で山女と虹鱒の混雑種が釣れるが、信州では見たことがない。信州では岩魚の生息域は標高1,400m前後であるが、こちらでは主に標高200m以上の上流だ。また、岩魚が毛針を追い始める時期は、信州では、虫が飛び始める６月上旬。こちらではなんと８月である。岩魚の活性が落ちる産卵期も、信州では８月の終わりだが、こちらでは10月と遅い。餌となる虫や発生時期、高緯度による夏期日照時間の延長などが関与しているのだろう。こういった新たな発見も、渓流釣りの楽しみの一つである。

ところで、私の父は、肺気腫を患っていたが、鮎の友釣りが解禁となると、仕事（板金屋）そっちのけで連日友釣りに没頭する釣りバカだった。生前は「（鮎友釣りの）川で死ねたら本望だ」と言っていたが、川でなく病院のベッドで70歳にて他界した。私も父親譲りの釣りバカだろうが、くれぐれも訪問診療や入院の患者には迷惑をかけないように、北海道の渓流釣りを楽しもうと思う。そうそう、羆（森の主）とは格闘しないように気をつけたい。

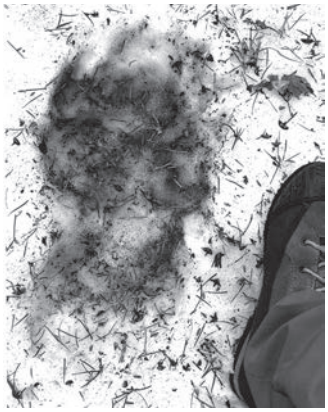

写真１：人の足が約30cm

写真２：魚は46cm

写真３：フォークが24cm